

INTERNATIONAL ERIC NEWSLETTER

No.1

JUNE 1990

エリック ニュースレター

国際理解教育・資料情報センター International Education Resource & Information Center

国際理解教育・資料情報センターとは：

近年、日本は政治、経済、文化などさまざまな分野において一層の国際化が進み、世界のあらゆる国々や地域、あるいは人々との交流が行われており、相互依存・信頼関係をさらに深めていかざるを得ない状況におかれています。

このような状況の中で、「教育の国際化」を求める声はますます高まりつつあります。国レベルでは、臨教審によって何本かの柱の一つとして掲げられ、それを具体化するための方策が求められています。同じように地域レベルでも、多くの自治体がその教育方針の中に国際理解教育を位置づけるようになっています。そして市民レベルにおいては、「次の世代には、国際的視野を持たせたい」という大きな期待があることはいうまでもありません。

しかし、このような掛け声とは裏腹に、国際理解教育への取り組みはまだ緒に就いたばかりというのが現状です。

私たちはこのような状況を改善し、教育の国際化を表面的なものに終わらせないために、特に学校・教室レベルの国際理解教育の推進のための具体的な資料情報を提供していきたいと思っています。

より具体的には、「この世界とその中で起こっている様々な変化を学校の中で子供たちにどのように教えていいのだろうか?」「複雑で難しい問題を適切に、しかも楽しく教えることはできるのだろうか?」「理科や体育には関係ないんじゃないかな?」「国際的な視点を導入することの重要性は認識しているが、準備に時間がかかるたり、他の授業にさしつかえるのは困る!」「社会教育の場ではどのように扱ったらいいのだろうか?」

目次

〈特集〉 オーストラリアの国際理解教育	2
事例1：かよわい中国の熊・パンダ	2
事例2：誰もが勝つことだってできる	4
事例3：じゃがいもと友達になろう	6
事例4：今日のわたしじだれ？	7
事例5：ミニ国連	8
事例6：フォト・ランゲージ	10
ニュースレターの編集方針	11
情報コーナー	11

こうした教師や指導者の思いや悩みに応えるために、教師、研究者、民間団体の有志が集って開設したのが国際理解教育・資料情報センター（略称：ERIC）です。

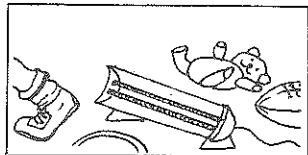
ERICは、このニュースレターの編集・発行以外に、

- ① 関連資料を集めた資料室の運営
- ② 学習教材およびその他資料の編集（翻訳）・出版
- ③ 国内研修（ワークショップ・セミナー）の実施
- ④ 海外研修の実施
- ⑤ カリキュラム開発等への相談・アドバイス
- ⑥ 交流や体験をベースにした調査・研究の実施などの事業を展開していきます。

また、ERICの特徴としては、

- ① 独自の調査・研究・開発機能を持つ
- ② 海外の類似団体との連携・協力を持つ
- ③ 国内の民間団体や教師の研究会との連携・協力を重視する

を是非あげておきたいと思います。なぜなら、これらの特徴は上記の事業を展開していく際に不可欠な要素だからです。



特集：オーストラリアの国際理解教育

〈特集〉の目的は、多様な、しかも新しい国際理解教育の具体的手法を紹介することです。この多様性と新しさを優先するあまり、ニュースレターの編集方針の柱である「楽しく」「気軽に」「わかりやすく」の方をおろそかにしないように極力努力したいと思っていますので、よろしくお願ひします。

各教案は、原案に可能な限り忠実に翻訳する形でます

紹介し、その後に教案の内容、その教案をおさめているテキストの解説を加えます。しかし、教案についての解説はあくまでも一通りの解説であって、異なる視点からの解説が他にもいろいろ可能であり、また日本の教育の現状を踏まえるといろいろと問題点もあるかも知れません。皆さんのご意見、ご批判、ご提案をお待ちしています。

事例1：

かよわい中国の熊・パンダ

導入：

パンダは、世界的にももっとも絶滅の危機に瀕している動物のひとつです。科学者は、いくつかの理由をあげています。

- ・ 種として衰退の過程にあるという説
- ・ パンダのきわめて制限された食生活
- ・ きわめて低い繁殖率に加えて、成熟するまでに要する年月の長さ
- ・ 人間が伐採してしまうことによって起こっている竹林の減少
- ・ パンダの密猟

パンダはすでに保護されている動物であり、パンダを狩猟することは禁止されています。10の保護区も指定され、科学者たちは厳密な研究にとりかかっています。竹の品種改良に取り組んだり、パンダの生殖について研究しています。

中国政府と国際自然保護基金は、すでに数億円を研究や教育（広報）に費やしています。中国国内でもたくさんの団体が活動しています。例えば、中国自然保護協会はパンダの研究のために毎年募金活動をしています。学校でも、パンダについて学んでいます。

中国人の農民は、パンダを好運をもたらすものとしてとらえており、殺したり傷つけたりすることを極力避けてきました。1975年に、甘粛省の農民たちはたくさんの飢えたパンダを見つけ、食糧を与えました。いまでも、農民たちは観察者であり協力者として、学者たちの研究になくてはならない存在となっています。また、現在、22

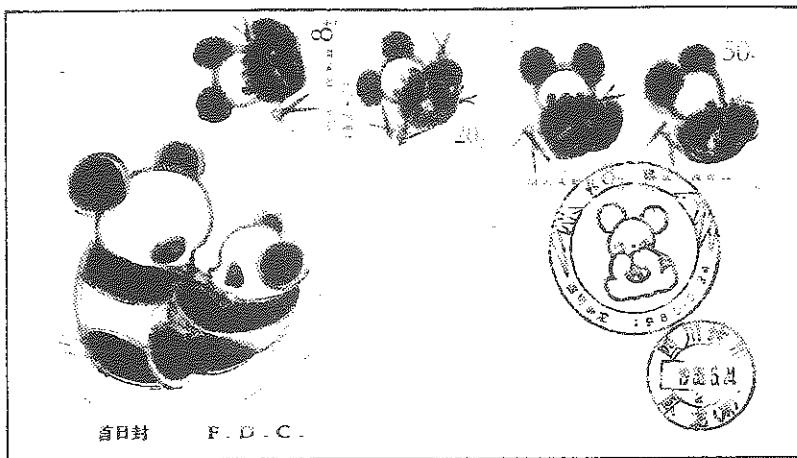
のパンダの救援センターがあり、各村には救援チームが編成されています。中国政府が、パトロール・チームや医療チームおよびエサの経費を負担しており、それとは別に、村人たちも不法に竹が切られないように（竹は料理に使われる）、パンダの保護地区をパトロールしています。

展開：

1. 1組3人か4人ずつのグループをつくる。
2. どのグループもパンダ保護委員会の委員であると想定する。パンダ保護委員会は国際的な自然保護団体で毎年パンダを保護するための資金を援助しているが、今年は8つのプロジェクトへの申請を受けた。
3. それら8つのプロジェクトの内容を読み、各グループで、是非援助すべきものからあまり重要でないものまで順番を決める。
4. 今年は3億円の資金援助をするものとして、どのプロジェクトに資金を出すか決めることが各グループに与えられた任務である。申請された8つのプロジェクトの全申請額は11.1億円。プロジェクトは全額を援助してもよいし、部分的に援助してもよい。（但し、援助総額は3億円であることに注意。）
5. 各グループで、どのプロジェクトを援助することにしたか、その理由、なぜ他のプロジェクトには援助しないことにしたのかなどを、他のグループに説明できるようにまとめる。
6. グループ同士で結果を比較してみる。一番多くのグループが援助の対象に選んだプロジェクトはどれか。また、その逆に一番少なかったのはどれか。なぜ結果に違いがでたのか。



パンダを救うためのプロジェクト



この封筒を使うことによって得られた収益は、パンダの保護のために使われています。

広報：

中国の全家庭に、病気になったパンダを医療チームが到着するまでの間、看護するためのパンフレットを配布する。

申請額：1.5億円

パンダ・エイド：

アフリカ飢餓救済コンサートと同じように、パンダ救済のチャリティー・コンサートを世界各地で開く。 申請額：1.0億円

竹の栽培：

1年間を通して竹の供給が満たされるようにな、パンダが最も好むアロー・パンプーの栽培に力を入れる。 申請額：0.9億円

森林警備隊：

警備隊員をパンダの生息地に配置し、パンダを脅かす人間や動物を監視する。

申請額：今後10年間に2.0億円

博物館：

業者がパンダを皆殺しにし、はく製にして、世界の主な博物館に送る。

申請額：0.8億円

パンダ保護区：

新たに4つの保護区を設置し、竹林を特別に植林して、観光客が自然のままでパンダを見ることができるような配慮をする。

申請額：1.2億円

研究：

パンダの繁殖力の向上、特に人口受精等の可能性に力を入れて研究する。

申請額：1.7億円

動物園：

専門の狩猟家にパンダを全部捕らえさせ、温度が調節された檻のある世界中の動物園に送る。

申請額：2.0億円

7. もし、援助額が半分の1.5億円になったら、どのプロジェクトを援助したいか。

8. 8つのプロジェクトの他に、パンダを守るためによいプロジェクトはないか。

参考文献：NEW-WAVEGEOGRAPHY, Geography Teachers' Association of Victoria 1988

○教案の解説

ねらい：
• 地球上に絶滅の危機に瀕している動物たちがいることを知り、自然環境への理解を深める。
• 実際、様々な自然保护活動が展開されていることに気づく。
• 問題解決に向けての態度と技能を養う。

対象： 小学生（高学年）、中学生、高校生

教科： 社会、地理、理科、特活など

時間： 1～2時間

なぜパンダなのか？ オーストラリアでも、日本と同様にパンダは子供たちの人気者で、動物園のパンダの檻の前にはいつも人だかりができている。このテキス

トの中で、特にパンダを取り上げて学習しているのも、そういった子供たちの興味・関心を生かしたことと思われる。もちろん題材としては、パンダでなくアフリカ象や鯨を取り上げることも可能である。

この授業は、「かよわい中国の熊」という7時間で構成されている単元の6時間目のものである。従って、前後の授業の展開を踏まえて行えば、一層効果が得られるることは疑いない。流れとしては、マンガを使って、2050年頃に予想される動物のあり方に思いをはせることから始まる。次に、写真や地図を使って、どんな動物が絶滅の危機に瀕しているのかを知る。そして、2時間にわたる詳しいパンダについての学習があった後に、ここで紹介した授業が行われる。最後は、この教材が作られたビクトリア州の地元にスポットをあて、身近に行われている狩猟活動について考え、各自の意見をまとめる形で終わっている。

なおこの教案で取られている手法という観点からみれば、環境を扱ったテーマに限らず、例えば老人や障害者福祉、あるいは極めて今日的な日米貿易摩擦の問題など、さまざまなテーマに応用できることも見逃してはならないだろう。



○テキストの解説

事例1は、ビクトリア州の「地理教師の会」が開発・編集した教科書からの抜粋である。日本の教科書のイメージとは異なるこのA4版『ニュー・ウェーブ・ジオグラフィー』は、一度ページを開いたら忘れられない。まず目に飛込んでくるのが、すでに紹介した「かよわい中国の熊」の单元の扉として掲げられた1ページ大のパンダの写真である。それに続く多彩なイラストと、写真、地図、マンガ。これらが実に豊富に使われていて、視覚に訴える要素が強い。子供たちは、思わず引き込まれて内容に対する興味を刺激されるに違いない。

自然環境以外に扱われているテーマは、難民、居住問題（特に「住む家を持たない」人々）、世界の食糧問題、資源利用、高齢化社会、先進国と発展途上国における健康、森林（特に熱帯林）、女性、観光などであり、こうしたテーマ設定の仕方がまず“ニュー・ウェーブ”ジオグラフィー（地理教育の新しい波）と呼ばれる所以である。また、このような現代社会における地球規模の事象や課題を子供たちが理解できるように丁寧に、かつ“楽しく”説明した上で、子供たち自身が解決策を模索できるような指導が展開されていることも、“ニュー・ウェーブ”的な要素であろう。

このテキストが開発されるに至った背景説明には、もう一冊のテキストを紹介する必要がある。それは、イギリスで1985年に出版されて以来、世界的に国際理解教育に関心を持つ教育者たちによって広く利用されてきた指導者用のテキスト『ワールド・スタディーズ』（世界学習）である。国際理解教育のカリキュラム開発の理論と、即実践できる80以上の授業案からなっているが、このテキストを参考に、あるいはこのテキストから刺激を受けて、独自の教材開発に取り組んだ教育者は少なくない。

『ニュー・ウェーブ・ジオグラフィー』も、そのような熱意をもった教師たちの集る地理教師の会によってつくりだされた。（なお、ERICは現在両テキストを翻訳しており、『ワールド・スタディーズ』は今秋に出版予定です。出版以前に翻訳を読んだり、授業案を実践してみたい方、あるいは原本を入手されたい方は、ERICへお問い合わせください。）

事例2：

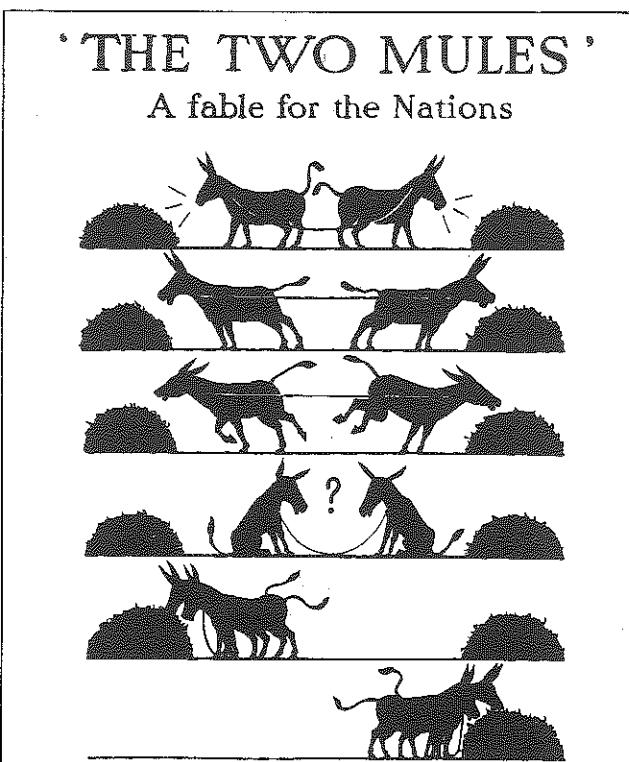
誰もが勝つことだってできる

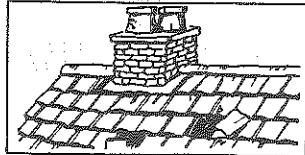
導入：

私たちは誰でも、家庭で、学校で、職場で、地域で、大きく言えば世界で、さまざま問題にぶつかっています。従って、そうした問題や対立を創造的に利用することによって、暴力を使わないで問題・対立を解決する技能を学ぶことは、極めて重要なことでしょう。

自分の考えを通すことができずに、妥協して、我慢しなくてはならないことは少なくありませんが、時には、他の人の考え方の方がよいと気付くこともあります。

ここに紹介する2頭のラバの話は、私たちの日常生活の中で起こることを象徴的に表しています。また、こうしたことは、国レベルでも頻繁に起こっていることです。



**展開：**

- 2頭のラバの絵を見ながら、次の間に答えさせる。
1. 6コマのラバのイラストからあなたの受ける主なメッセージ（印象、感想）は何ですか。
 2. ラバがこのイラストに使われているのはどうしてですか。
 3. ラバがそれぞれの目標を達成することができなかつたのはどうしてですか。
 4. 2頭のラバは、それぞれの目標を達成できないとわかったときどうしましたか。
 5. 2頭のラバは、目標を達成することができましたか。
 6. 2頭のラバが、もし互いに相手の基本的な必要を満たすこともできるんだ、ということを知らなかったら、どうなっていたでしょうか。
 7. 協力する方が、破壊的な衝突よりどうしてよいのでしょうか。
 8. ラバのメッセージが当てはまるような状況をあなたの生活の中で考えられますか。
 9. ラバのメッセージが当てはまるような国際的な出来事を考えられますか。できるだけリストアップしてみなさい。

参考文献：EDUCATING FOR PEACE ACROSS THE CURRICULUM IN PRIMARY AND SECONDARY SCHOOLS, A joint IYP/ACTTF/ACT Schools Authority Project, 1987

○テキストの解説

この教案は、『初等・中等教育カリキュラムにおける平和に向けての教育』の最初の单元におさめられている。本テキストは、「平和」を現行のカリキュラムの中でどのように学習できるかを紹介した手引書であるが、平和を実現するための不可欠条件として二つのことをあげている。一つは問題・対立の解決、もう一つは肯定的でお互いに配慮し合う人間関係である。従って、平和教育は単に戦争の無い状態ではなく、問題・対立を認識し、それに建設的に対処し、人間の創造性と肯定的な感情や人間関係を育てる状態を目指す教育であると説明している。この定義は、本テキストに限らず、オーストラリアにおける平和教育の理念と目標を説明する際にしばしば使われる基本概念である。

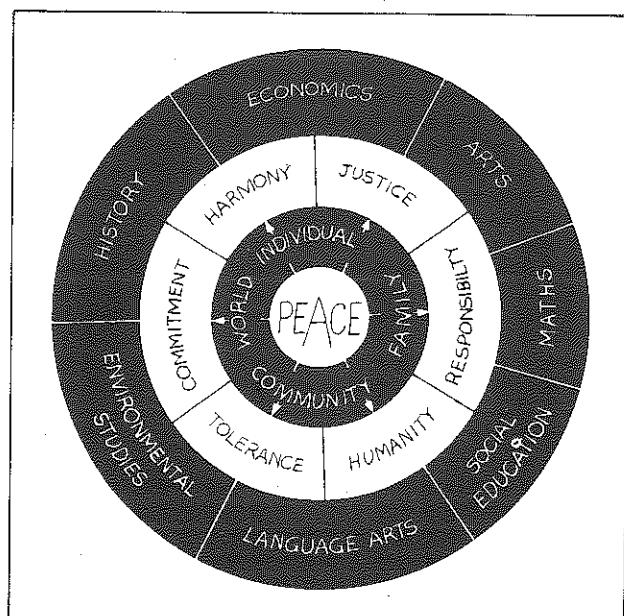
オーストラリアでは、1986年の「国際平和年」をきっかけとして、学校教育の中で「平和」への取り組みが積極的になされるようになった。平和重視の教育の研究・実践が、どちらかと言えば州単位で行われてきているので、州によって実情が随分異なっている。学校教育の中に積極的に導入しているのは、ビクトリア州とニュー・サウス・ウェールズ州である。内容はかなり広範におよび（図参照）、アプローチも様々であるが、強調されているのは、平和について (about peace) 教えるだけでなく、平和に向けて (for peace) 教えることが重要であるという点である。

○教案の解説

- ねらい：・問題や対立にぶつかった時に、どのようにしたら誰もが満足のいくような結果を得られるのかを考える習慣を身につけさせる。
・勝敗をつけずに全員が勝利を手にすることもあり得ることに気付かせる。
・平和の意味することを理解させる。

対象： 小学生（中～高学年）

教科： 道徳、特活、英語（高校生～大学生）



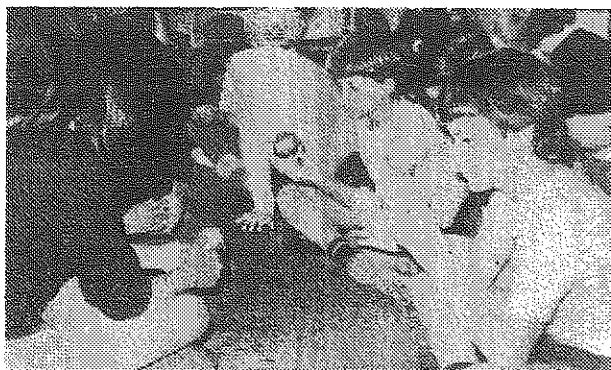


事例 3 :

じゃがいもと友達になろう

展開 :

1. 「あの人たちは、みんな同じさ。」というステレオタイプによる偏見について話し合う。
2. 生徒にじゃがいもを一つずつ配る。
3. 各自に配られたじゃがいもと友達になるように言う。
ほんの小さな特徴も目立つ特徴も含めて、そのじゃがいものことを本当によく知っている友達になる。
4. 数名に、順番で各自のじゃがいもをクラスに紹介させる。細かい特徴の説明や、畑から教室までどのような過程をたどって来たのかという話などをさせる。
5. じゃがいもをもとの箱に戻して、全部一緒にかき混ぜる。
6. めいめいの友達であるじゃがいもを、ほかのじゃがいもと区別して見つけさせる。
7. このじゃがいもを使った学習からわかること——即ち、どんな集団に属する人も同じように見えるが、一度彼らと知り合いになってみると、彼らはみな異なっている、従って、時間をかけて人々を個人として知るということは、あわてて判断して偏見やステレオタイプに陥る危険を少なくするということを指摘する。



参考文献 :

TEACHING FOR HUMAN RIGHTS: Activities for Schools,
Ralph Pettman, Human Rights Commission, 1984
『人権のための教育：授業にすぐ使える活動事例集』 ラルフ・ペットマン著、明石書店、1987)

事例 4 :

今日のわたしはだれ？

展開 :

1. 1枚の紙を6等分に切りなさい。それぞれの紙に自分自身のことを表す言葉を1つずつ書きなさい。誰も読まないので、できるだけ正直に書きましょう。
2. あなたの一一番好きなところを表した言葉を上に、一番嫌いなところを表した言葉を下にして順番に並べなさい。
3. あなたが書いた言葉について1つずつ考えてみましょう。
 - それが好きですか。
 - それをとっておきたいですか。
 - それを捨ててしまいたいですか。
 - それについてもっと説明を加えたいですか
4. もしその中のうち2つしかないしたら、どうなるか想像してみましょう。
あなたは変ってしまうでしょうか。
5. 1～4を通してあなたが自分自身について新たに発見したことや感じたことを2つ書きなさい。
6. サークルの時間に、5で考えた2つのことについてグループの人に話してみましょう。

コメント： 子供たちが言葉を書き始める前に、予め、自分のことを説明するのに使えるような語彙をたくさん黒板に書いておくと、授業が進めやすくなると気づいた。
(授業を実際に実践した教師から寄せられたコメント)

<補説>

「サークルの時間」というのは、このテキストの中でしばしば登場する手法である。どの子供も積極的に意見を出したり、クラスの活動に参加したりできるクラス作り、そうした雰囲気の中で集団の結束が固まるようにと工夫された手法である。(事例1で紹介したパンダの授業もこの手法の変形と言えるかもしれない。) ここでの授業案を使って応用してみると、4～10人ぐらいの



輪になって座り、話し合う内容の鍵となる文章を書いたカードをまわす。例えば、「わたしは、自分の_____と_____について知りました。」というような文を書いたカードである。各自がカードの空欄に適当な言葉を補って文章を作りながら、自分の意見として発表するのである。自分の意見を発表することと他人の意見を聞くことにより、自尊心と他人に対する寛大な態度を身につけることをねらいとしている。

参考文献：

TEACHING FOR HUMAN RIGHTS: Pre-school and Grades 1-4, Ralph Pettman, Human Rights Commission, 1986

○テキストの解説

国際化の進展とともに、大きな問題となっていることの一つが異なるものへの対応である。外国人に限らず、自分と異なっていたり見慣れない人に対して、ついで固定観念や先入観など偏った目を向けがちである。集団で見ると、個性がなくみな同じに見えるものだが、ひとつひとつ手に取って観察してみると、あるいは一人一人と知り合ってみると、実はそれが個性を持っている、他とは違っているのだということを上の2つの教案はわかりやすい例を使って指導している。

これらの教案は、『人権のための教育』（もう少しいい翻訳があるはず！）におさめられている。これらのテキストは、オーストラリア政府が人権教育を推進するため作成した教師用手引書で、全国各地の学校や教師を巻き込んで展開されるという世界でも前例のないプログラムに大役を果たした。参考文献に掲げた2冊以外にも、『人権のための教育：5～10年生』『反人種差別：成人教育指導者用の手引』が出版されている。

○教案の解説（事例3と4）

- ねらい：
 - ・どんなもの（人・物）でもそれぞれ特性を持っていて、決して同一ではないことを体験を通して気づかせる。
 - ・多様な個性を尊重することにより、固定観念にとらわれずに物事の真価を見極めようとする態度を身につけさせる。

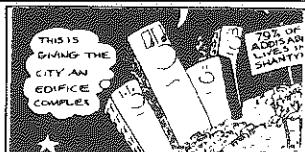
対象： 小学生（中～高学年）、中学生

教科： 道徳、国語、英語（高校生～大学生）など

時間： 1時間

事例4については、展開の1で、自分の特性を6つあげることを通して自己を省み、正面から対峙してその特性に気付かせる。次に2で、それを順番に並ばせることによって、自己評価させる。3で一つ一つの特性に対して、各自が抱いている感情をたどってみることで、自己を理解するのを助ける。4の「6つのうち2つを残して、自分の特性がなくなってしまったとしたら・・・」と想像させることは、自分が自分でなくなってしまうことを身を持って感じさせ、自己に対する愛着心、及び自己の個性（自分を自分たらしめている特性）を尊重する態度を培うのに役立つ。5と6では、友達と話し合うことを通じて、互いの特性に気づき合うとともに、特性に対する各自の思いを共有することによって、互いの個性を尊重するようになる。

事例4の参考文献『人権のための教育：就学前～4年生』も指摘しているように、自己と他者、つまり「わたし（たち）」と「他の人（たち）」の両方をともに価値あるものとして受入れることは人権意識を培う基盤であり、それなしに人権に関する知識だけを与えても成果を得ることは難しい。この基盤の上に、年齢にふさわしい、より具体的な人権の要素に関する知識（自由・平等・正義などの価値観、あるいは、人種差別・性差別といったこと）が提供されることによって、人権意識を高める学習は、意味のあるものになる。なお、自己を尊重する態度と社会や他人に共感する態度は、幼児・学童期のかなり早い段階に形成されることが数々の調査から指摘されており、従って、幼児～小学校低学年ではこれら二つの指導に力を入れることが極めて重要であると思われる。



事例 5 :

ミニ国連

- ねらい：
 • 国際的な出来事への関心と知識を高める。
 • さまざまな国の名前やその場所、また抱える問題等に関心と知識を高める。
 • 国連のような国際機関の機能を学ぶ。

時間： 1週間に1時間(継続的に行うことが望ましい)

準備：

1. 学期の始めに、それぞれの生徒に自分が代表する国を選ばせる。(あるいは先生が与える)。選んだ国によっては、たくさんの情報量があり忙しい人もいるが、国によってはまったく情報がないこともある。(そのこと自体どうしてか、あとで論じることも大切。) そのような国を選ぶ場合は、複数の国ないし地域全体を担当することが望ましい。(たとえば、太平洋の島国やアフリカ、中南米の国々など)

生徒たちは、毎日新聞やテレビを通して、自分の担当する国で起こる様々な情報を収集する。新聞の場合は切り抜きを整理して持ってこさせ、会議の行われる日には事前にカベなどに貼って他の生徒も事前に見られるようにする。

2. 教室の机の配置を口の字型に変える。

厚紙に各国の名前を英文で書いて、生徒の前におく。討議事項を事前に黒板に書き上げる。(会議の場では、討議事項以外には話し合えないことを学ぶ。)

議長の席を確保する。(始めのうちは教師がするが、慣れてくれば、順番に生徒にさせるようにする。)

生徒は、紙(ノート)と鉛筆を持って出席し、しっかりと記録を取る。

展開：

1. 毎週1回(1時間)、ミニ国連を行う。
2. 生徒は、自分の担当する国の出来事(政治、経済、社会)を会議の場で発表できるように準備しておく。全員が発表できる時間はないので、誰がどのような内容の発表をしたか記録を取っておくことは大事。次回

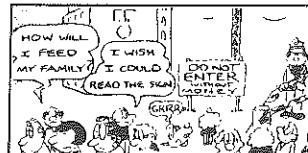
は、前回あたらなかった人や、テーマをカバーすることができるよう。

3. 報告が終わったら、参加者は他の参加者誰にでも質問をすることができる。その時、満足な答弁ができなかつた場合には、次の討議事項にそれをあげ、次回までに答弁の準備をしてもらう。
4. 各国の代表は、様々な出来事に対するその国の政策を、たとえそれが自分の考えに反するものであっても、指示しなければならない。もし、代表が十分な説明をしていなかつたり、事実を曲げていたり、あるいは国自体が人権を侵害していたり、侵略的な行動にでた場合には、不信任決議を持ち込むことができる。
5. 國際的な紛争の際には、國連の安全保障理事会を開く。理事たちは他の代表たちの前で討議し、投票する。拒否権の発動についても学ぶ。理事会で決定したことは、加盟国全部が従わなければならないことも。

教師の役割：

- 先生自身もある程度の新聞切り抜きなどをして、情報を集めておくことが必要。(なかなかうまくやれない生徒を助けるためにも。)
- 全体の流れを確保すること。中には、興奮がちな生徒もいるし、積極的でない生徒もいる。可能な限りバランスのとれた参加をつくりだす。
- おもしろくすることも大切。そのためには、いい質問やコメントを先生から発することが不可欠。
- バランスは生徒の参加だけでなく、会議で話される内容についても言える。政治や大国についてばかりでは偏ってしまう。そのためにも記録を取っておく。

参考文献：LEARNING FOR A FAIRER FUTURE: Classroom Activities & Resources on Global Trade & Social Justice Issues, Lyn Waddell, The World Development Tea Co-operative with the Geography Teachers' Association of New South Wales, 1988



○教案の解説

対象： 小学生（高学年）、中学生、高校生

教科： 社会、公民、特活など

この活動には、「外国の政治、経済、社会問題を扱うので、小・中学生の手に余るのではないか」「新聞などは大人でも目を通すのはなかなか大変なのに、子供には無理ではないか」「新聞やテレビが報道するニュースというのは限られていて、あつかう国も世界のほんの一部にすぎないのではないか」といった感想を持たれる方も少なくないと思う。しかし、各自が責任を持って継続的に、特定の国に関するニュースを追うというのは、いろいろな発見を導き出す活動である。社会の出来事や外国に対する関心を持たせることが大切だとはいっても、教科の学習だけでは補い切れないこともあり、特別活動などの時間を利用して、生徒が楽しめる活動として位置づけて実施してみることもできるかもしれない。

この教案のままでは多少無理があるという人にも、学年（小・中・高）に応じた利用の仕方が考えられる。たとえば……

- ・自分の国が、新聞やテレビのどの面（政治、経済、社会、文化、スポーツ、教育、テレビ欄等）で報道されたかを記録できる表を作り、毎回会議を開いた時に全員が書き込む。

この表からわかること（頻繁に／稀に報道されるのはどの国か？ 国によって報道される分野の特徴があるか？ など）を話し合う。

- ・個人で一国を担当させるのが無理であれば、ペアないしグループで一国（一地域）の情報収集することも考えられる。

○テキストの解説

このテキストは、ニュー・サウス・ウェールズ州の「地理教師の会」とスリランカの生産者から直接紅茶を輸入している民間団体との協力で作成された。そこに紹介されている数多くの授業案では、生徒がよりよい未来を導く可能性を模索し、社会的な資質を養うための知識・態度・技能をバランスよく学習することが目標とされている。この理論は、国際理解教育を取扱うカリキュラム開発の手引きの中でしばしば使われているが、本テキストの編者も前述の『ワールド・スタディーズ』を参考にしている。

また、このテキストで扱っている主な題材は、地球規模の貿易関係における不公正や豊かな先進諸国と貧しい発展途上国との格差の増大である。ここで紹介した教案は、このテキストの第1章「問題はたくさんあり、それらは私たちの生活と結びついている」に含まれている。この章は、世界の国々や出来事に関心を持たせ、それらが自分たちとつながっていることを示すことを主な目的としており、以後の問題分析や原因究明に発展する導入として位置づけられている。第2～4章では、貿易の不均衡や植民地主義や多国籍企業が発展途上国にもたらしている影響を軍事・援助・債務などを含めて詳しく学習し、第5～6章では、自国オーストラリアの位置づけを学習したうえで、課題と自分たちのつながりを理解し、最終章の第7章では、一人一人がどのように解決に向けて参加できるかを考えさせている。

コメント

ウェンディー・パウチャーさん（元ニュー・サウス・ウェールズ州多文化教育コンサルタント）

「オーストラリアでは、“教科書を使っている教師はダメな教師”というイメージがあります。高校入試がないので、教科書をあえて使う必要がないのです。最近は、高校でも知識より技能を重視する傾向にあります。

日本でいう国際理解教育というものは、オーストラリアには存在しません。（日本では、それはどうも英語教育や国際交流に置き換えられているようですが。）オーストラリアでは、多文化教育、人権教育、環境教育、平和教育、開発教育、グローバル教育等が、互いに重複し合いながらも、個別に展開されています。

もう1点、日本とオーストラリアの教育で違いを感じるのは、コンサルタント（日本では、指導主事：訳者注）の役割です。オーストラリアには既存の各教科に加えて、多文化教育、人権教育、環境教育、平和教育等のコンサルタントがいます。専門性を重視されて、2～3年契約で雇われる人達（元教師）ですから、一生懸命に新しいアプローチの普及等に努力します。」



事例 6 :

フォト・ランゲージ



展開：

写真は、1985年にエチオピアからスーダンに逃れた難民です。(実際の写真は、A4サイズ。)

1. (写真に関係ないので省略)
2. この写真をトレーシング・ペーパーに写して、4人の人を選び、マンガふうに一人一人が何を考えているのかを吹出しを付けて(短い文で)書き込みましょう。
3. あなたがこの写真を撮影した写真家であると仮定して、どうしてこの場面を選んで撮ったのか考えてみましょう。あなたの写真が国際的に有名な雑誌に掲載されたとしたら、この写真にどのような見出しを付けますか。
4. この写真を見て、あなたが感じることを、4つの言葉ないし短い文章で説明して見ましょう。
5. あなたは写真の中の女性の一人と仮定して、あなたがエチオピアを去らざるをえなくなった原因やスーダンでの新しい生活に望むことなどを簡潔にまとめた文章で書いてみましょう。

参考文献：

- NEW-WAVE GEOGRAPHY, Geography Teachers' Association of Victoria, 1988 (pp. 20-21)
PHOTOLANGUAGE AUSTRALIA: Human Values, Jan Cooney & Kevin Burton, Catholic Education Office, 1986

○解 説

フォト・ランゲージのねらい：

- ・個々人が自己を表現する機会を持つ。
- ・個々人の表現の独創性を評価し、刺激し合う。
- ・集団の中で、個々人の相違点に気がつくことによって、互いの理解を深め合う。

フォト・ランゲージ(写真言語)は、集団の中で個人の考え方や感情を表現するための効果的なコミュニケーション手段である。写真が見る人の創造力をかき立てたり、記憶を呼び起こしたり、感情を刺激したり、さらには反省を促したりする効果を利用して、写真で扱う対象だけでなく、自分自身や他の人々についての理解を深める手段として利用できる。

フォト・ランゲージ・オーストラリアは、海で遊ぶ子供たちのシルエット、落下傘で空中を落ちていく人、猫を抱く少年、膝の上でこどもをあやす親、プラカードを持つ女性、交錯する線路など、実際に様々な写真50枚を1セットにしたもので、これを使って様々な活動が展開できることがマニュアルに書かれている。例えば、「この中から、あなたの好きな写真と嫌いな写真を2枚ずつ選んでください」「あなたの人生で一番重要なものを表す写真を選んでください」「あなたにとっての自由を表す写真を選んでください」といった具合である。

もちろん、たくさんの写真を揃えないとできないということはない。それは、事例6からも分かる。しかし、写真は芸術性において優れているだけでなく、社会的、文化的要素を含んでいることがコミュニケーションを促す材料として望ましい。

ニュースレターの編集方針

ニュースレターは、ERICが収集した、あるいは独自につくり出した資料情報を読者・利用者の皆さんと共有するための一つの重要な媒体です。また読者の皆さんにとっては、自らが情報を発信することによって、ERICおよび他の読者と情報やメッセージを共有することができる媒体であるわけです。その意味では、「読者の参加」こそがこのニュースレターの編集方針の柱であることを、まず“宣言”しておきたいと思います。

それ以外の編集方針としては、

- 楽しく、気軽に、わかりやすく
- 既存の情報誌との重複をさける

「気軽に」および「わかりやすく」は、「すぐ使える」「だれでもできる」ということです。

情報発信者= 情報コーナーは、すべて連絡先明記を原則とします。

東京の、それも北区の片隅にあるERICが、関東の、ましてや全国の情報を網羅することは到底不可能。もちろん、読者全員に発信者になって頂きたいのですが、特に名乗り出で、皆さんの地域の動きを定期的に発信してくださる方募集中。

普及員募集= このニュースレターを口コミや手渡しや郵送で普及してくださる方募集中。(何部くらい必要かお知らせください。)

編集員募集= 編集委員会がいくら努力したところで、ニュースレターとなって印刷される情報は全体の何十分の1か何百分の1。直接、よ

り多くの情報に接したい方募集中。

紙面構成: さしあたって、最初の4号については以下の紙面構成を考えています。

- 特集： 国際理解教育への多様なアプローチを紹介することが目的(第2号はアメリカ。第3号はイギリス。第4号はオランダを予定。その後は、国別からテーマ別等の切り口に移行したいと思っています。)
- 情報コーナー： 国内で国際理解教育に関心を持つ人の情報交換スペース
 - こんなことしてます(自分のやっていることの紹介=事例紹介)
 - お知らせします(イベント・セミナー・本・報告書の紹介など)
 - 一緒にやりませんか
 - 情報さがしてます
 - 私はこう思うのですが…(読者同士のやりとり、ERICのしていることに対する意見・感想・提案等)
 - 海外情報
 - 今、ERICでは…

記事の募集: 情報コーナーの各項目に当てはまる情報、ドンドンお送りください。

なお、このニュースレターの発行にあたっては、庭野平和財団から印刷費・郵送費等に助成を受けております。また、この編集方針の部分でいちばん参考にしたのは、自治体学会のニュースレターでした。

情報コーナー

○こんなことしてます

♪児童数90名の小規模小学校での国際理解教育の実践

鳥取県岩美町立蒲生小学校では、2年前から『国際理解クラブ』の活動を開始しました。クラブ活動として展開することにしたのは、発想の自由度や行動の自由度が大きいからです。クラブ員が中心にアイディアを出し合い、①身近にある品物で、外国製品を集めてみる。そして、どこの国から多く来ているか世界地図の上で調べる、②外国人と直接話をする、③外国の料理を

作ってみる、④外国人と手紙や小包を交換して、外国の様子を教えてもらう、⑤自分の行ってみたい外国の都市への旅行プランをたててみる、などの活動を行ってきました。

その他にも、授業参観に出席したお母さん方を対象に実施した国際化および国際理解教育に関するアンケート調査を実施しました。その結果、回答者全員が国際理解教育は学校教育の中で必要だと考えていることが分かりました。(ちなみに、オーストラリアのビクトリア州が州を挙げて平和教育に取り組み始めるようになったきっかけ

を作ったのは、教師と児童・生徒を対象に実施したアンケート調査でした:編集者注)

発進・村上洋司(蒲生小学校教諭)

〒681 鳥取県岩美町蒲生2413

tel: 0857-76-0008

○お知らせします

♪『アジアとともに』

国際理解学習を促進するための一助として、東京都水元青年の家で行っている23区青年教育セミナーの報告書が近々発行されます。

『われら地球人』(1988年12月発行、残



情報コーナー

部なし)に統いて、今回は神奈川県の国際交流協会や川崎市の「ふれあい館」が行っているユニークな活動の紹介、アジアの料理を食べながら国際交流を深める事業や在日外国人に日本の言葉や文化をわかつてもらうために行った事業、そして昭和63年度23区の国際交流・国際理解学習関連事業一覧表等、主としてアジア問題の学習に役立つ手引き的な資料として作成します。

発進・東(ひがし)寿隆 (水元青年の家)

〒125 東京都葛飾区水元公園3-3

tel: 03-600-0245

〉『“楽しく”世界とつながるイベントの事例集』

「からだをうごかして」「身近なものを通して」「人と場所を通して」「視覚に訴えて」「アーティスティックに」などユニークなまとめ方で、海外および国内の数々の事例を紹介しています。学校教育でも社会教育でも使ってみてください。

発進・水口哲 (『事例集』編集委員会・問い合わせは ERIC) 1部600円

〉『たみちゃんシリーズ』第6弾

『たみちゃんシリーズ』は神奈川県の“民際外交”を代表する成果物のひとつです。第1弾～第3弾は、『たみちゃんと南の人びと』としてまとめられ、明石書店から出版されています。第6弾のテーマは、『たみちゃんと熱帯林』です。

発進・荻村哲朗 (神奈川県国際交流協会)
〒231 横浜市中区山下町2 産貿ビル9F
tel: 045-671-7012

〉大豆を通した国際交流・国際理解

婦人之友社・友の会が、過去5年間行ってきた「バングラデシュとの台所の交流」を、『大豆を通して、ベンガルの女性たちと友だちになれた』という報告書にまとめました。国際協力というよりは、むしろ、バングラデシュから学んだことの方が多く、私たちの日々の暮らしを活性化してくれたことから、今後もこの台所の交流を大

切に育てていきたいと願っています。(報告書は、日記風にまとめられている5回の訪問記録の部分が中心だが、日本とバングラデシュの生活を比較したさまざまなデータ、大豆料理のレシピ、「台所の改善」を題材にした紙芝居なども紹介されている:編集者注)

発進・保田和子 (婦人之友社・友の会)

〒171 東京都豊島区西池袋2-20-11

tel: 03-971-9602

○私はこう思うのですが...

〉ERICへの期待

国際交流クラブを創設し、校外から多彩なゲストを招いて国内外の文化・伝統・習慣をはじめとするものの見方や考え方の多様性に触れる機会を作っています。

ERICには、資料の収集・提供を通して現場と現場を結ぶ媒体の役割を果たしてほしいと思います。現状では、隣の学校でいい実践が行われていてもわかりません。また、「教育の国際化」も極めて表面的なレベルなものでしかないような気がしています。日常のレベルで、誰にでも実践できる国際理解教育の教材や教案が出来ることを期待しています。

発進・小林茂 (県立柏西高校)

〒277 柏市中十余二字元山205-1

tel: 0471-32-7521

〉ERICへの期待

広くオープンに、国際理解教育推進活動が展開され広がっていくことを望んでいます。地域の民間ボランティア団体や学校教師を含むいろいろな立場の人が協力して輪を広げていける体制づくり、およびそのための支援をERICに期待します。

発進・川野清 (市立三橋中学校)

〒331 大宮市三橋1-300

tel: 048-641-0793

○今、ERICでは...

〉翻訳・出版プロジェクト

トヨタ財団から助成を受けて、海外の優れた資料を翻訳・出版します。まず、手始めはイギリスの『ワールド・スタディーズ』。アメリカの食糧問題を題材にしたテキストや、今回の特集でも紹介したオーストラリアの『ニュー・ウェーブ・ジオグラフィー』の翻訳も進んでいます。出版前に読んでみたい、試してみたという方はご連絡ください。

〉レッスンパンク・プロジェクト

大竹財団よりの助成で、教案および生徒用のハンドアウト等、1回の授業で必要な資料を1セットにまとめた教師用の授業(レッスン)案をテーマ、項目、国・地域別に保管し、利用者が閲覧・複写して使えるようにするプロジェクトも進行中です。9月までには、100の授業案が完成予定。

〉トレーニングコース

庭野平和財団からの助成を受けて、教室や学校で国際理解教育にどのように取り組むことが出来るのかを体験して頂く研修コースです。翻訳・出版プロジェクトやレッスンパンク・プロジェクトの教材や教案を実際に使いながら、“楽しい”国際理解教育の実践を可能にします。お問い合わせは、ERICへ。

〉オーストラリア研修ツアー

ニュースレターの特集で紹介したオーストラリアの国際理解教育を実際体験して頂くために企画しました。いくつかの学校の授業参観はもちろんのこと、州教育庁や民間団体も訪問します。日程は、今夏8月22日～29日を予定しています。お問い合わせは、ERICへ。

ERIC International ERIC NEWSLETTER No.1 June 1990
国際理解教育・資料情報センター

〒114 東京都北区田端1-21-18 津田ビル1F 電話=03-5685-1177

このNewsletterの印刷・編集費用の一部は庭野平和財団からの後援です。

リサイクルを考え、印刷用紙に再生紙を使用しています。